（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　　中野貴文

本論文は、作品『徒然草』が誕生する文学史的な必然を、「消息的テキスト」という独自の視点から解明しようとした論文である。第一部「消息的テキストの濫觴―藤原孝道―」、第二部「消息的テキストの展開―阿仏尼―」、第三部「消息的テキストの達成―兼好―」の三部構成を取り、それぞれ三章から成る整然とした構成を持つ。

第一部は、まず第一章で『紫式部日記』を取り上げ、著者のいう「消息的テキスト」について、対話の代替として自由さを確保するテキストであるとの定義づけと意義づけが行われた後、第二章・第三章では藤原孝道の楽書が分析される。孝道の『雑秘別録』や『残夜抄』が、実際には演奏することのない娘に向けた私的テキストであるゆえに師説継承から自由な書記テキストとして成立したことなど、これら楽書への新たな意味づけを提唱する。

第二部は、阿仏尼の散文作品の分析に充てられる。『乳母のふみ』が娘への消息体の教訓書であることが、女が自由に自説を開陳し、批評性を獲得する契機になったとし（第一章）、同書とは一見性格の異なる物語的日記『うたたね』とも、時空を越えた読み手を想定しうる書記テキストへの信頼が見られるという点で共通すると指摘する（第二章）。次に『十六夜日記』の鎌倉滞在記部分につき、実際の消息が再構成され、一対多の交流をも可能にする「消息的テキスト」の発展形が看取されることを指摘する（第三章）。

第三部では、第一部・第二部の論述を踏まえ、『徒然草』の表現の達成がどのように形成されたかを論じる。第一章は、『徒然草』第一部（序段から第三十八段まで）を、兼好から「見ぬ世の人」という、不在の読み手に宛てて記された消息であり、「消息体テキスト」の究極の形であると定義し、当該部分の解釈に新生面を開いた。第二章は、比較的凡庸なものにとどまる『徒然草』第一部に比して、第三十八段以降第二部の、百段辺りまでを対象とし、それら多様な文体をもつ特色ある章段がなぜ生まれたかを論じる。その要因は、書くことが対話の代替行為でありながらも、特定の聞き手の不在を原動力として、多様な他者へと開かれたことだという。これまで述べてきた文学史的展望を媒介にして、作品『徒然草』のもつ多様性の意味という、最も不可解かつ根本的な文学的問題に、新しい解答を与えている。第三章は『徒然草』第二部全体に論述を拡大し、『徒然草』の想定する読者が兼好自身にほかならないこと、すなわち『徒然草』が自己との対話を試みる作品である、と結論する。『徒然草』を、芸道の専門書から専門性を捨象したもの、と規定する斬新な着眼による論証が、この結論の説得性を高めている。

従来『徒然草』の文学的研究は、この作品を作者兼好の個性や思想に還元してなされることが通例であった。本論文は、実在した作者兼好を一度不問に付し、書かれた作品として、表現の歴史の中で位置づけし直した。その際、「消息的テキスト」という画期的な視点を設定した。そのことによって、『徒然草』を兼好の思想に閉じ込めずに読む新たな方法を提示しただけでなく、これまであまり重要視されてこなかった鎌倉時代の楽書や女流日記文学の文学史的意義を発見することにも成功している。さらに具体的な作品の表現によって検証すべき点など、今後の課題もなお存するが、本審査委員会は、上記のような研究成果に鑑み、本論文が博士（文学）の学位に相当するものとの結論に至った。